ティーチング・ステートメント

所属　薬学部薬学科
名前　平山　早苗
作成日　2024 年 2 月 26 日

【責任】

生命科学分野に所属し、専門科目である生化学を中心とした教育と研究活動を行っている。主な教育活動は、三大栄養素の中でもタンパク質・アミノ酸と脂質の代謝に関わる基礎を学ぶ２年生対象の「生化学Ⅳ」と生化学に関連する学生実習、４年生対象の「薬と疾病（内分泌・代謝性疾患）」、6 年生対象の「総合演習Ⅱ」および１年生対象の「早期臨床体験実習」のうち心肺蘇生を含む救急法の実習、4～6 年の卒業研究生の研究指導、そのほか学生の学修支援や学生活動の一つである「薬物乱用防止局」の担当などである。

【理念】

学生は、大学で学んだ高度な専門知識を身に付けるとともに、他者と協調し自分で考え行動できる人間力を兼ね備えることが必要と考える。学んだ知識を臨床現場で応用でき、物事の関連性や多面的に見ることのできる能力を持った医療人としての薬剤師に育って欲しい。

医療は日々進歩しているため、常に新しい知識・スキルを修得する必要がある。医療現場では、患者を中心に多くの医療専門職がそれぞれの役割を担い、連携したチーム医療を行っている。そのためにも、継続した学修と臨床に対応できる応用力、知識だけでなく多方面から患者を支えることができる薬剤師になれるような学生を育てたい。

大学で学ぶ膨大な知識を効果的かつ効率的に定着させるとともに、常に「学び」の本質やその目的を見失わないように学生を導くような講義を行い、様々な課題に対応できる人材を育成する。

【方針・方法】

「学生が興味をもって自ら学修する」ために、「基礎知識を確実に身に付ける」こと、および「学びながら関連性を意識する」ことが出来るように、講義等を構築している。

「基礎知識を確実に身に付ける」

大学で学ぶ高度な専門知識を身に付け、活用するためには、基礎となる知識が確実に修得できていることが必要となる。

・小テスト・課題を実施し、達成目標ごとの理解度・知識の定着の確認を目指している。
・学生が復習しやすいように、学修内容のポイントを講義ノート中に示している。
・授業アンケートを基に講義プリントや講義資料の見直しを行い、改善に努めている。
・基礎知識が、疾病による代謝変化や治療薬の選択につながるように講義内容を構築する。
・国家試験問題への対応に加えて、代謝経路などの説明が効果的・効率的にできるような課題を提供する。
・学生自らの言葉でわかりやすく、説明できるかを問う課題や問題を提供する。

「学びながら関連性を意識する」

学んだ知識を臨床現場で応用でき、物事の関連性や多面的に見ることが出来るためには、学びながら物事の関連性を見出していくことが大切になると考える。

・講義中に科目間の関連性を意識させ、基礎と臨床を結びつける内容を盛り込み、理解を深めさせる。
・上級科目の講義資料や国家試験問題を提示して、低学年での学びが基礎にあり、関連していることを示す。

「学生が興味をもって自ら学修する」

学生は講義内容に限らず、興味があることは自ら進んで学修する。興味を引き出し、学修のきっかけを作ることが大切と考える。

・講義内容に即したトピックスの提供や学生が理解しやすいような例えを示して、学生の興味を聞くように努める。
・「なぜ、代謝について理解する必要があるのか」など学びの本質に気づきが得られるような授業展開に努める。
・卒業研究では、学生の希望を尊重したテーマを選ぶことができるように努力する。
・「薬物乱用防止局」の活動では、地域への貢献を重視し、学生が主体となって活動できるようにサポートする。

【成果・評価】

・授業アンケートでは、多くの学生が概ね満足との評価を得ている。
・講義ノートは使いやすく、見直ししやすいと評価を得ている。
・小テストや課題により理解度が確認できたと学生のコメントを得た。
・卒業研究では、学生の研究結果を毎年、学会で発表させている。
・「薬物乱用防止局」の活動において、薬剤師会主催のキャンペーンに学生と主に参加し、薬剤師の先生方から、学生の活動に高評価を得ている。また大学祭での活動で、地域住民からも高評価を得ている。

【目標】

・短期的には、科目の繋がりとわかりやすさ、面白さが伝わるような授業展開を行う。（2024 年度）
・講義修了後に、講義動画を視聴できるようにし、いつでも復習できるようにする。
・上記を受けてシラバスの見し、授業アンケートの目標達成度の「非常にそう思う」「そう思う」を 90%以上とする。
・授業アンケートの解答率を上げ、建設的な意見を記載してもらうように声がけする。
・長期目標としては、一人でも多くの学生が卒業後も学び続けるように刺激し、患者に寄り添い、頼れる薬剤師として社会に貢献できる人材を育成したい。
・薬の知識だけでなく、生活や身体のことについても患者にわかりやすく説明できるようになってもらいたい。